

子どもの行動を周囲との関係や影響の中から捉える 事例検討の在り方に関する研究[†]

今野菜穂子*・鈴木 徹**

秋田大学教育文化学部附属幼稚園*・秋田大学教育文化学部**

本研究では、特別支援学校小学部に通うASD傾向のある児について事例検討を行い、関係性や内面に着目しながら子ども理解を行う方法の検討や、その効果の検証を行うことを目的とした。結果として、子どもの行動を周囲との関係や影響の中から総合的に捉える事例検討においては、子どもに関する要素を項目立てて可視化し、それらの関係や影響に着目しながら一つ一つに検討を加えることが重要であることが分かった。また、定期的に複数回行うことで、教師が定期的に自分の支援を振り返り、早期に支援を改善することにつながった。さらに、同僚性の高い小集団で検討会を行うことで、支援に悩んでいる教師の困り感や負担感をサポートすることにもつながっていた。

キーワード：子ども理解、関係、内面

I 問題と目的

自閉症スペクトラム障害（Autism Spectrum Disorder, 以下ASDと記す）児の事例検討や支援方略の検討には、応用行動分析や行動療法の手法が多く用いられてきた。記録に基づき、どのようなときに問題行動が起りやすいのかといった行動の生起の条件や状況を見たり、行動を変容させる段階的な介入の仕方を検討したりする際に非常に重要な視点である。しかしながら、その問題行動を減少させたり変容させたりすることはできるが、一時的なものであったりこだわりは持続したりすることが課題として挙げられてきた（岡本, 2014; 松下・園山, 2009）。上記の手法では、行動の本来の意味やその行動に至る子どもの内面に着目する視点が足りない

ため、行動の根本となっている本人の困り感（不安、苦しさ、怒り、寂しさ等）を解消できない可能性がある。

「子どもたちの姿や行為は、常にその子どもの内的世界を背負って現れているものであり、行為の背後には必ずその子どもにとっての行為の『意味』が存在している（高嶋・砂上・森上, 2011）」。それぞれ固有性をもった人が様々に影響し合い、そこで起こっている出来事や相手の行動、気持ちを主観的に感じ取りながら関わる中で私たちは生きている。その中で何かが起きたり変わったりすることは、その人単体、もしくは何かとの二者間のみで起こっているものではなく、その人を取り巻く周囲も同時的、又は段階的に変化してその行動が生じたり変容したりしている。子どもの行動の「意味」を探るためには、その人を取り巻く周囲の関係や状況、その変化や影響も含めてダイナミックに捉え、それら周囲とのどのような関わりや影響の中で、その姿や行動が起きているのかといった視点に着目する必要がある。

今野・鈴木（2020）は、周囲との関係の変化が子どもの行動の変容に大きく影響していることを指摘

2021年12月24日受理

[†]Naoko KONNO* and Toru SUZUKI**, A study on the ideal way of case study to grasp the behavior of children from the relationship and influence with the surroundings

*Kindergarten affiliated with Faculty of Education and Human Studies, Akita University

**Faculty of Education and Human Studies, Akita University

した。また、子どもの姿や行動の変容と教師の支援の変化は、お互いに影響を与え合いながら連続的、または同時的に起こっていることが明らかになった。本研究では、その視点を踏まえて、複数の事例を対象に事例検討を行い、関係性や内面に着目しながら子ども理解を行う方法の検討や、その効果の検証を行うことを目的とした。

II 対象と方法

対象：A県内の特別支援学校小学部の教員2名（以下、B、Cとする）であった。それぞれ事例児童を1名ずつ抽出した（以下、b、cとする）。

教員B：小学部1年担任、女性、教員経験4年（児童b：小学部1年女児、知的障害、自閉症、「泣き叫ぶ」行動あり）

教員C：小学部2年担任、女性、教員経験3年（児童c：小学部2年女児、ウエスト症候群、「大声を出す」行動あり）

方法：ボードを用いて事例児童についてそれぞれの教員が希望した3～4名の教員を含めた計4～5名で、3回の事例検討会を行った。ボードは事例教員が記入したシートを拡大して100cm×60cmのホワイトボードに貼り付けた。Ⅱ期以降は前の期のボードを隣に貼って比較できるようにした。筆者は会のコーディネートと記録を行った。3回の検討会終了後に2名の教員から聞き取りを行った。検討会の概要は以下の通りである。

事例検討会①（教員B、児童b）

参加者：教員B、TTの教員2名（うち1名は筆者）、学部主事

実施：7月、10月、12月

事例検討会②（教員C、児童c）

参加者：教員C、TTの教員2名、学級所属の教員

実施：6月、9月、11月

III 結果

1) 事例検討会①（教員B）

第Ⅰ期：〈4月～6月〉

周囲の状況：小学部入学、新担任3名であった。母と姉の3人暮らし（父は単身赴任）であった。向精神薬を服用していた。

bの様子：簡単な指示を理解して行動できた。不安定なときはおんぶなどスキンシップを求めた。泣き叫ぶ行動はやりたいことを止められたときなど1日

1回程度発生した。

Bの支援：bの行動や内面を理解したいと思っているが、bの様子は変化しやすく、因果関係も分かりづらいものが多かったため、なかなか捉えづらいつと感じていた。bが活動の切れ間で何をするのかわからないと不安定になることが多いため、絵カードを用いて予定の確認を行った。また、bの甘えたい、不安という気持ちを受け止め、スキンシップの要求にはできるだけ応えた。

参加者からの意見：学校生活に対する不安もあるが、その反面これまでの母親の影響が大きい生活から、学校でやっと自分をのびのびと発揮できるようになったと捉えることもでき、bにとっては良い変化となっている。母親の育児に対する負担感、不安感が強いなどの意見が出された。

今後の方向性：活動の終わりに次の活動を分かりやすく示すことにした。伝わらないもどかしさを情緒的な関わりの中で共感する。母親に対しては不安感・不信感が溜まらないようにこまめに話を聞き、TT間で共通理解を図るようにした。

第Ⅱ期：〈7月～9月〉

周囲の状況：夏休みに父が2週間帰省した。

bの様子：どこかに行くときに教師を連れて行こうとした。褒められるとうれしそうになるようになった。7月に向精神薬を変えたところ、泣き叫ぶ行動が1日6回程度に増加したが、服薬を戻すと1日1回程度に戻った。朝のトイレの前、好きな遊びができないときなど起こる状況が決まってきた。

Bの支援：泣き叫ぶ行動が減少し、普段の様子の変化からbとの関係の深まりとbの成長を感じていた。bが何に楽しさ・うれしさ、または不満・不安を感じるのか、少しずつ分かってきた。bは活動に使う物を持ってきて要求を示すことが多いことから、活動に使う具体物を示して次の活動に誘い、できたときには大いに称賛した。母親との談話をこまめに行い、家庭でできる具体的な手立てを示した。

参加者からの意見：表情が豊かになり、不安そうにしていることが減った。集団への安心感や周囲の人への愛着行動が増した。bの状態が母親へ与える影響が大変大きいので、母親の負担感や不安感を軽減するために、現在学校で行っている支援の期間や意図もわかりやすく伝えるとよいとの意見が出された。

今後の方向性：「これが終わったら好きなことができる」を分かりやすく示すこととした。意思表示の方法を探るとともに、母親との談話を継続し、学校で行っている支援の期間や意図まで伝えるようにした。

第Ⅲ期：〈10月～12月〉

周囲の状況：風邪薬や副鼻腔炎の薬を服用。睡眠のリズムが乱れ、登校時間が変わったり下校後通院したりと変則的な生活が続いた。

bの様子：好きな遊びを担任と一緒にやりたがるようになった。視線を合わせたり、ダンスなどで得意気な表情を見せたりするようになった。やりたくないことは手や首を振って伝えるようになった。泣き叫ぶ行動は1日3～4回程度で若干増加した。活動の切り替わりや下校時に多かった。登校しぶりが見られるが登校すると機嫌よく過ごしていた。

Bの支援：泣き叫ぶ行動は増加していたが、bの人と関わりたい気持ちの高まりや、生活に簡単な見通しをもてるようになったという成長も感じていた。bの担任に見てほしい、褒められたいという気持ちを大切に、Ⅱ期での支援に加えて、bが「できた」と感じる機会を多く設定して大いに称賛するようにした。

参加者からの意見：人と関わりたい・関わってほしいという気持ちが高まっている、分かることが増えた分、それが叶わなかったときにも泣き叫ぶ行動が出ていると考えられる。母親が担任との日頃の談話を通してbの可愛さやスキンシップの必要性を実感できるようになってきたとの意見が出された。



図1 事例検討会の様子

今後の方向性：自分の行動により相手がどう感じているかを伝えることとした（「できたね」「すごいね」だけでなく「うれしい」「ありがとう」も、「ダメ」「やめて」だけでなく「悲しい」「痛い」も）。情緒的な共感をさらに大切に関わることとした。

2) 事例検討会②（教員C）

第Ⅰ期：〈4月～6月〉

周囲の状況：家族は両親と妹であった。休日は祖母母宅に預けられることが多かった。2年生になり、担任が2名変わった。トイレトレーニング中であった。

cの様子：簡単な指示を聞いたり手順表を見たりして行動できた。指差しや発声で要求や気持ちを伝えた。周囲の人への関心が高まっている様子が見えた。大声を出す行動はうまくできないときややりたいことを止められたときなど、1日1～2回発生していた。

Cの支援：cが大声を出すのにはいくつかの要因があると感じつつも、起きる状況が様々だったため、捉えきれないと感じていた。意思表示の手段の獲得のために国語・算数で絵カードと文字のマッチングを行った。イメージどおりにできなかったときに大声を出すのではないかと捉えから、できたときには大いに称賛した。好きな活動を一緒にを行い、関係づくりに努めた。

参加者からの意見：家庭ではcの要求に全て家族が応えてくれるような状況であり、大声を出す行動は要求の伝え方の誤学習であると考えられる。今は担任を試している状態であるとの意見が出された。また、周囲の刺激に反応しやすく、変化が苦手な傾向が見られるため、理解していることは多いのに必要な場面でうまく表出したり使ったりできていない印象があるとの意見が出された。

今後の方向性：「大声を出さなくても伝わる・見ている」を繰り返し伝えるようにした。できそうな役割を与えて褒められる機会を増やすこととした。文字が役に立つ・使うと伝わることを実感させ、要求の適切な伝え方を示すこととした。

第Ⅱ期：〈7月～9月〉

周囲の状況：トイレトレーニングがほぼ完了した。

cの様子：要求を指差しやクレーン行動で伝えるようになった。人の反応を楽しんだり、人のまねをして遊んだりするようになった。大声を出す行動は学

校ではほぼ消失した。自宅で母親に対してのみ見られた。

Cの支援：大声を出す行動が消失し、また、できることに自分で取り組もうとする、褒められるとうれしそうにするなどcの成長を感じ、cを肯定的に捉えるようになった。指差しやクレーン行動が増えていることから、授業の中に自己選択の場面を多く設定するなど、良いところ・伸びてきているところを生かした支援を追加した。

参加者からの意見：提示したものをよく見るようになり、自分なりに様々なものから情報を得ている様子がある、体操や手遊びなど見てまねしようとするようになったなどの様子が語られた。大声を出す行動はなくなったが、担任との関係においては必要ないとcが感じた結果であり、相手との関係を試すためにまたいつでも出現しそうでとの意見が出された。

今後の方向性：見本を示しながら教師と一緒に取り組むことでできることを増やすとともに、一人でできることを定着させて自信につなげる。パターンではなく物事のつながりや関係性が分かるように、分かる経験を繰り返して積み重ねるとともに、情報理解の力を高めることとした。

第三期：〈10月～11月〉

周囲の状況：二期とほぼ同様であった。

cの様子：要求を伝える指差しやクレーン行動が増加した。楽しいと声をあげてはしゃぐようになった。「ママ」のような発声が見られ、母親が大変喜んでいった。大声を出す行動は母親に対してのみ継続していた。

Cの支援：cの人と関わりたい、相手に思いを伝えたいという気持ちの高まりを感じて、表出手段の獲得のための支援を増やした。感情表現が豊かになったことから、二期での支援に加えて、その場に合った感情を言語化することに努めた。また、相手に伝わる発語を増やすために、国語・算数で発音指導を開始した。

参加者からの意見：担任とのコミュニケーションを楽しむ様子が多く見られる。今は文字の理解や感情の言語化よりも「伝わる経験」を大切にしたい支援をした方がよい。母親がcの発語を喜び、興味をもっているため、家庭でも発語のための環境ができるように母親にも関わり方を示していきたい、大声を出す以外の表出の方法で「NO」を表出し、それが通る経験が必要であるとの意見が出された。

今後の方向性：相手に「伝わった」ことをcが実感

第二期 <20xx年 7月 ~20xx年 9月>

保護者

子ども

教師

☆今後の方向性

- 一人ですべてを定着→自信
- 見本を示しながら一緒に
- そのときそのときは理解しているが → 物事の関係性、つながり (つながりではなく) がわかるようになること
- ① くりかえしの練習
- ② 情報理解

【現在の状況】

【自分の現在の状況】

【子どもの内面について】

【課題となっている行動について】

【保護者からの意見】

【行っている支援】

【今後の方向性】

図2 事例検討会で使用したボード

できるように、cからの表出に共感的に関わることを大切にすることとした。発語のための伝えたい・伝わる環境を家庭と連携して整えることとした。「NO」を適切な方法で表出できるように、「NO」が通る状況を意図的につくってそれを受容するようにした。

IV まとめ

どちらの検討会もとても活発に意見が交わされた。第一の要因として、事例教員が希望した3～4名の教員というメンバー構成が挙げられる。小さい集団であることで一人一人が考えを出しやすく、且つ事例教員が話をしたいと思うメンバーを募ることで、思いや悩みを率直に言いやすい雰囲気がつくられた。

第二の要因としては、子どもと教師を取り巻く要素が可視化されたボードを囲んで意見を出し合うという形式である。要素に分けたことで意見を出す項目が増え、今どこに着目して話をしているのかが分かりやすくなった。支援に悩んでいる最中のボードには教員の困り感が示されているが、児童に関わる複数の教員から新たな視点加わり、いくつか示された「今後の方向性」の中から選択して支援を組み直していた。定期的な検討会で自らの捉え方や支援を都度見直し、早期に支援を改善することへとつながっていた。

V 考察

子どもの行動を周囲との関係や影響の中から総合的に捉える事例検討において必要なことは、本研究をとおして以下の2つが提言できる。一つは、子どもに関する要素を項目立てて可視化し、それらの関係や影響に着目しながら一つ一つに検討を加えることである。これまでは、子どもの問題行動とそれに対する教師の支援をまとめた紙資料を配布して行う形式が多く取られてきた。本研究では、子どもの問題行動、普段の行動、子どもの内面、保護者の様子など、要素ごとに記入したシートを拡大して貼り付けたボードを見ながら話し合うという形式で行った。また、会を進行するコーディネーターが、一つ一つの要素について「各々の捉え」として意見を集めるとともに、要素の関係や影響にも着目させながら話を進めた。

児童bはⅡ期では泣き叫ぶ行動が減少していた

が、Ⅲ期ではまた増加している。しかし検討会をとおして、bの人と関わりたい気持ちが高まったこと、音声言語や写真の理解が高まり生活に見通しをもてるようになったことなどの変容があり、それらが叶わないときにも起きて増加していることが分かった。また、母親のbの捉え方の変化や、今行っている共感的な称賛、制止に加えて、自分の行動で相手がどう感じているかを伝える必要性が話題となった。そこから、bとの情緒的なやりとりを増やす、写真カードも用いて予定の予告を行い不安感を無くす、家庭でも行ってもらえるように母親へ情報やツールの提供を行う、などの支援につながった。教員Bからは「泣き叫ぶ行動はまた増えたが、bの成長とその要因を実感することができた。1つの成長が色々なところにつながっていると分かった。」との話があった。

この形式で話し合うことで、問題行動に対する支援のみに偏らず、子どもを取り巻く要素それぞれに働き掛けて現在の状況を改善していこうという視点での支援が導き出された。子どもに関わる様々な要素とその関係が可視化されていることで、様々な要素が関わって子どもが変わっているということを実感でき、今どの要素に働き掛ける必要があるのかを考えることができたからである。また、それぞれの要素について丁寧に意見を集めたことで、記入した教員が見えていなかった部分も明らかになり、子どもの姿や行動が立体的に描かれた。加えて「内面に対する捉え」や「問題行動に対する捉え」の項目があることで、行動の変容だけでなく、常に子どもの姿や行動の「理由」や「意味」を考えることにつながった。各々が主観的に捉えたその子の姿や内面を出し合うことで、自分との関係においてのその子の姿のみならず、様々な関係の中での姿も知ることができ、より立体的で深い子ども理解につながった。

もう一つは、定期的に複数回(3回以上)行うことである。これまでは、問題行動が顕著になっている事案が発生したときに1回又はその経過観察を含めて2回行うことが多かった。本研究では、1人の子どもについて定期的(2～3か月おき)に3回(今回は3回で終了したが、年度末にもう1回行えるとよい)行った。おおよその時期が示されていることで、検討会が近づくとボードを記入する視点で子どもの行動を見るようになり、教師が定期的に自分の

支援を振り返る機会となった。2～3か月おきに行うことで、現在行っている支援の効果を十分に検証でき、子どもの変容が見えやすかった。また、問題行動が消失した後も継続して検討会を行った。児童cは第Ⅱ期でほぼ問題行動は消失していたが、なぜなくなったのか、支援の何が効いたのか、cに関わる要素のどこが変わったのか等を前の期のボードと比較して考えた。問題行動が改善した経緯と要因を分析することにより、問題行動が示していた意味や子どもの内面の変化を見ることができた。また、なぜ良くなったのか、支援のどの部分が子どものどこに効いたのかを明らかにすることによって、今後の支援の手掛かりとすることができた。

加えて、同僚性の高い小集団で検討会を行うことも重要であった。今回事例教員が希望したメンバーは、TTの教員と普段事例児童に関わっているベテラン教員の計3～4名という構成であった。普段子どもと一緒に支援しているいわば「当事者」が集まったメンバー構成だったからこそ、指導に悩んでいる教員が率直に思いを明かすことができ、一緒にこの子の成長を支えようという前向きな雰囲気の中で検討会を行うことができた。教員Cからは「支援に悩んでいるときにこのボードを記入するのは少し辛かったが、自分の支援だけでなく、周りの状況や子どもの内面といった他の情報も書くことで負担感が少し減った」という話があった。子どもの行動の改善だけでなく、支援に悩んでいる教員の困り感や負担感をサポートすることにも資することができたと考える。

今後の課題は、教師自身が自らの実践を振り返り、どのように自分が変わっていったのかを描き出すことである。自分ができるようになったことを認識して整理することにより、今後意識的にそれらを実践することにつながるため、教師が自らの変化や成長を分析的に見て実感することは重要であると考えられる。筆者の実践においては、自分が何から影響を受けて自分の内面がどのように変わったことで支援が変わったか、ということを読み出すのに大変時間がかかった。また、事例教員への聞き取りで自分の支援に影響を与えたものを聞き取っているが、3回の検討会を通しての自分の変容については詳しく言及できなかった。3回の検討会のボードを分析するとそれぞれの教員の思考や支援の組み方の特徴、周囲からの影響などが見える。それらを教員自身が実

感し、今後に生かすことができるような効果的な方法について考えていきたい。

文 献

- 岡本邦広 (2014)：学校における行動問題を示す発達障害児の指導・支援に関する連携方法の現状と課題。特殊教育研究, 52(3), 217-227.
- 松下浩之, 園山繁樹 (2009)：強いこだわりを示す広汎性発達障害児における家庭場面への支援の事例検討－刺激フェンディング法を用いた衣服へのこだわりの軽減－。障害科学研究, 33, 159-171.
- 高嶋景子, 砂上史子, 森上史朗 (2011)：子ども理解と援助。ミネルヴァ書房。
- 今野菜穂子, 鈴木 徹 (2020)：周囲との関係や内面に着目した子ども理解の在り方に関する研究。秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要, 43, 153-159.

Summary

The purpose of this study was to examine cases of children with ASD tendencies who attend elementary schools in special schools, to examine methods for understanding children while focusing on relationships and internal aspects, and to verify their effects. .. As a result, in the case study that comprehensively grasps the behavior of the child from the relationship and influence with the surroundings, the elements related to the child are itemized and visualized, and each one is examined while paying attention to those relationships and influences. Turned out to be important. In addition, by doing this multiple times on a regular basis, teachers regularly looked back on their support and improved their support at an early stage. Furthermore, by holding a study group in a small group with high collegiality, it was possible to support the sense of trouble and burden of teachers who are suffering from support.

Key Words : Understanding children, Relationship, Inside

(Received December 24, 2022)